

機能訓練事業の学生の学びと今後の課題

金山 時恵 栗本 一美

地域看護学

What Students Learn in Rehabilitation Support Activities and Its Problems

Tokie KANAYAMA Kazumi KURIMOTO

(1999年11月10日受理)

高齢社会の中、高齢者の在宅ケア支援が必須課題の今日、在宅ケア関連施策は急速に充実が図られている。その中で、全高齢者の約8割は健康な人たちと言われる。何らかの疾病や軽度の障害を抱えながらも寝たきりや痴呆にならず、自立した生活を営んでいる高齢者に対して、その自立した生活を維持・助長するための一方法として、地域で行われているリハビリ教室という保健事業がある。地域看護学実習では、平成9年度から取り入れて行っている。今回学びを分析した結果、施設内で行われている治療的機能訓練から、地域で行われている自立支援の訓練へと継続した支援が行われていることから、その関連性を見出しその必要性が理解できていた。さらに集団の結びつきの強さとその効果を感じ取ることができていた。今後、集団へのアプローチの方法について具体的に理解を深めることができるよう演習等を取り入れた教育内容の工夫をしていきたい。

はじめに

平成4年度の国民生活基礎調査によると、在宅の65歳以上の高齢者のうち、何らかの介護を必要とする者は5.2%であり、78.3%の高齢者は「自分の健康は普通もしくはそれ以上」と考えていると報告されている。何らかの疾病や軽度の障害を抱えながらも寝たきりや痴呆にならず、自立した日常生活を営んでいる。その自立した生活を維持・助長するための保健事業の一つとして、地域で行われているリハビリ教室（呼称）がある。これは、老人保健法に基づく機能訓練事業の一つで各市町村で展開されており、T町においても、在宅で障害を持った高齢者の生活機能維持を目的に、通所リハビリや家庭に出向いての訪問リハビ

リが行われている事業である。

本学では、保健・医療・福祉の各分野における看護の機能と看護者としての役割について理解することをねらいとして、地域看護学実習の中で地域における機能訓練事業の実習を平成9年度から取り入れて行っている。2年間の機能訓練事業での実習の学びを、学生の記録から分析し、今後の実習計画および指導のあり方を考察する

1 研究目的

地域で行われている機能訓練事業での実習の学びを分析し、今後の実習計画および指導のあり方を考える。

表1 機能訓練の概要

	種類	対象者	内容
機能訓練	A型 (基本型)	40歳以上の者で ① 医療終了後も継続的に訓練を行う必要のある者 ② 必要な訓練を受けていない者 ③ 老化等で心身機能が低下している者	・歩行、起き上がり等の基本動作の訓練 ・食事、衣服の着脱等日常生活動作の訓練 ・習字、絵画、陶芸等の手工芸 ・レクリエーション及びスポーツ
	B型 (地域参加型)	老化等により心身機能が低下している者のうち日常生活自立度判定基準「J」ランクに相当する者 *「J」ランク：生活自立何らかの障害等を有するが日常生活はほぼ自立しており独力で外出する	・レクリエーション、スポーツ、絵画工芸等の創作を主体とした活動 ・交流会、懇談会及び地域の諸行事への参加等を主体とした活動

II 研究方法

1. 対象：本学看護学科3年生、30名
2. 期間：平成9年4月～平成10年11月
3. 方法：実習総括の学びの内容を一文一意味切り取り、内容分析を行った。抽出したデータをコード化し、同じ意味とされるコードをサブカテゴリー化し、さらにカテゴリーを抽出した。内容分析は、研究者間で繰り返し検討を行い、抽象化の妥当性を高めるよう努力した。抽出されたデータは、総数75件であった。

III 地域における機能訓練事業の概要

平成元年12月に公衆衛生審議会は、老人保健法に基づく医療等以外の保健事業において、地域リハビリテーションという言葉を取り上げた。その中で、寝たきり予防対策の推進の一環として地域リハビリテーションシステムの構築を提言し、保健・医療・福祉の有機的な連携、介護サービスを家庭に結び付ける体制の整備、障害老人の積極的な社会参加の促進等の必要性を指摘している。この提言を受けて、平成8年度からは新たに「B型機能訓練」が追加開始されるようになり、機能訓

練には、A型（基本型）とB型（地域参加型）の2種類がある。心身の機能が低下している者等の日常生活の自立を助けるという目的がある。さらに、B型は特に虚弱老人等の閉じこもり防止に着目し社会参加を促すことを目的としている。いずれにおいても、心身機能の回復のみならず、障害のある者や虚弱老人等を閉じこもり生活から開放し、社会参加への第一歩を踏み出すための機会を提供するという大きな役割がある。さらに、社会性の拡大や生きがい・創造の支援ということも大きな役割となる。

1. 機能訓練の概要（表1）

- (1) 機能訓練事業の目的：心身の機能が低下している者であって医療終了後も継続して機能訓練の必要な者等に対して心身の機能の維持回復を図るために必要な訓練を行い、日常生活の自立を助ける。
- (2) 機能訓練の対象者：当該市町村の区域内に居住地を有する40歳以上の者で次のいずれかに該当する者
 - ①医療終了後も継続して訓練を行う必要のある者
 - ②老化等により心身の機能が低下している者
- (3) 実施場所：訓練を行う場所は市町村保健センター、保健所、健康増進センター、老人福祉

センター、老人保健施設、公民館等で適当と認められる施設

(4) 送迎：対象者の心身の機能の状態に応じ、リフトバス等による送迎を行う。

(5) 実施方法

①訓練は医師及び医師の指導の基に理学療法士、作業療法士、保健婦、看護婦等が実施する。

②訓練の内容は、医療として行われる機能訓練とは異なり、概ね社会的機能訓練を中心とした訓練とする。

ア. 歩行、起き上がり等の基本的動作訓練

イ. 食事、衣服の着脱等の日常生活訓練

ウ. 習字、絵画、陶芸、皮細工、組み紐編み等の手工芸

エ. レクリエーション及びスポーツ

③対象者及び家族に対して家庭で継続して行える機能訓練の方法等について助言指導する。

(6) 実施回数及び実施期間

訓練の実施回数は概ね週2回とする。実施期間は概ね6ヶ月を1期間とし訓練の効果等を勘案して継続実施の適否の判定を行う。

2. T町での機能訓練事業の概要

午前：送迎バス到着後－健康チェック（血圧測定・問診）…学生担当－体操・自己紹介－訓練等自由時間－昼食

午後：レクリエーション…学生担当、手芸、スポーツ等－送迎

T町はA型とB型の混合で事業が行われており、地区を8地区に分けて1回の参加者は10～15名である。

3. 実習の概要

(1) 実習目的：地域における公衆衛生活動の実際を理解し、他職種・他機関との役割調整、連携を通して看護者の役割を理解する。

地域住民の健康の保持・増進への取り組みを理解する。

(2) 実習目標：事業内容の概要が理解できる。

地域における社会システムの実際とその背景にある法的根拠・目的が理解できる。

(3) 実習形態：平成9年度2人1組で実習延べ回数 8回

表2 実習記録から抽出された学習内容

n = 75

カテゴリー 数 (%)	サブカテゴリー 数
リハビリ教室の目的・方法 17 (22. 7)	①目的 12 ②方法 5
対象と健康状態 13 (17. 3)	③対象理解 9 ④個別性 4
学習の発展 13 (17. 3)	⑤社会資源への理解 7 ⑥対象の捉え方の広がり 6
信頼関係 9 (12. 0)	⑦グループとしての関わり 8 ⑧スタッフとの関わり 1
看護者の役割 8 (10. 7)	⑨役割 8
地域理解 8 (10. 7)	⑩地域性 8
連携・継続 7 (9. 3)	⑪連携 4 ⑫継続 3
合計 75 (100%)	

平成10年度2人1組で実習延べ回数 5回
 月4回実施の内、1～2回実習を行っている。
 保健婦の指導を受け、教員は学生との調整を図っている。

IV 結果

1. 実習記録から抽出された学習内容

抽出された学びは、総計75件であった。最も多かったものは、リハビリ教室の目的・方法17件(22.7%)、次いで対象と健康状態13件(17.3%)、学習の発展13件(17.3%)、信頼関係9件(12%)、看護者の役割8件(10.7%)、地域理解8件(10.7%)、連携・継続7件(9.3%)の順で7つのカテゴリーに分類された。(表2)

2. カテゴリー別学習内容

1) リハビリ教室の目的・方法

これは、2つのサブカテゴリーに分類され目的12件、方法5件であった。
 リハビリ教室は、身体に機能回復が目的だけでなく残存機能を持つこと、心のリハビリを目的としていること、また病院のリハビリとは違い部分的に機能訓練をするのみでなく全身と心を使って楽しく身体を動かすことと学び得ている。さらに、教室は高齢者にとって心のほりを保ちことに大きな役割を果たしている等、リハビリ教室の目的となることが理解できていた。一人暮らしや日中一人という方は家に閉じこもりがちなので参加することで社会的孤立の解消となり、外へ出ることが訓練になり日常生活の中の楽しみとして利用されるという学びからも意義が明確に理解できていた。また、訓練は決してつらいものではなく楽しいもの、遊びを通して行われており、強制的にリハビリをするのではなく一人一人のその日の調子に合わせてできることをされていることから、方法についての学びができていた。

2) 対象と健康状態

これは、2つのサブカテゴリーに分類され対象

理解9件、個別性4件であった。

車椅子の方や脳梗塞等麻痺のある方等身体障害を持っている方、また年齢の若い方等さまざまであり、また同じ立場の人達が集まることから、リハビリ教室の対象となる人が理解されていた。また、例え障害があっても決してマイナスに捉えず積極的に目標を持って参加していて意欲的だと感じている。

さらに、対象の健康状態はさまざまであることから、利用者の個別性に合わせて実生活に即した訓練が行われていた、ひとりひとりに合わせた器具を使用されていることから個別性の重視が理解できていた。

3) 学習の発展

これは、2つのサブカテゴリーに分類され対象の捉え方への広がり6件、社会資源への理解7件であった。入院から退院がゴールではなく、入院してから在宅に帰り生活するということまで考える、ただ話を聞くだけでなく健康や生活上の問題はないか等考えることも必要、地域に関わらずその人のことを理解することは大切なことから対象の捉え方への広がりがみられた。

次に、退院して在宅で有意義に過ごすためにはどのようなサービスがあり紹介できるか考えられるようになった、社会資源の利用、看護の継続性の大切さを知ることができたことから社会資源への理解の広がりがみられた。また、家に閉じこもり積極的に地域の活動に参加を進めることは必要など社会資源の活用へも眼が向けられている。

4) 信頼関係

これは、2つのサブカテゴリーに分類されグループとしての関わり8件、スタッフとの関わり1件であった。同じような経験や不自由さを抱えているから結びつきが強い、利用者同士の仲がよく励ましあうことで刺激になっているから利用者同士での信頼関係が強いということを知り得ていた。さらに、お互いの経験を話すことで安心でき、自分の可能性を発見できる、また同じつらさを知っていることで説得力もあるしやる気もでるから相互交流の場でグループとしての関わりが強く、

高まりがみられる。

5) 看護者の役割

これは、1つのサブカテゴリーに分類され役割8件であった。

スタッフは、利用者のことをよく理解されており絶えず笑顔で対応され、心の大切さを感じた、また心から楽しんでもらえるように工夫がみられ、さらに、焦らすことなくゆっくりした気持ちで支えられていた等からスタッフとしての役割を学び得ていた。そして、関わるスタッフはPTや保健婦でスムーズに行えるように周りで支える役割があるということが理解できていた。

6) 地域理解

これは、1つのサブカテゴリーに分類され地域性8件であった。

地域における機能訓練の実際を見ることで、地域で行われているサービスは地域住民にとって身近な存在、地域は本当に温かい等地域性について学び得ていた。また、障害を持っていても持っていないと一緒に暮らしていける地域づくりが大切ということも考えられていた。

7) 連携・継続

これは、2つのサブカテゴリーに分類され連携4件、継続3件であった。

病院やPTとの連携も大切、また保健婦だけでなくヘルパーやボランティアとの連携もあり、多くの職種が連携を図りながら専門的なサービスが行われていることを学び得ていた。さらに、障害を持っている方や健康な方が、連携しながら共に生活していく上でリハビリは大切なこと等仲間同士の連携についても考えられていた。

次に、医療は終了してもきちんと継続して訓練されていることがわかった、病院退院後の継続看護について知ることができた等から継続性についても理解できていた。

V 考察

本学では、地域で生活する人々の理解を深め、地域における看護の役割を理解させるため地域保

健活動として町役場で行われている機能訓練事業の一つリハビリ教室を学習の場としている。今回、学びを分析した結果、施設内で行われている看護から地域で行われている様々な施設でのさまざまな働きかけについて、関連性を見出したり、地域看護で大切となることを考え学び得ることができていた。

まず、地域で行われているリハビリ教室は、病院で行われている治療的機能訓練とは異なり、身体の機能回復だけでなく心のリハビリをも目的としていると学び得ていた。また、一人暮らしや日中一人で家に閉じこもりがちの方の利用を促し、社会参加を図ることで社会的孤立の解消につながることを学び得ていた。日常生活動作は自立し、戸外での活動が可能な場合でも、また大家族で生活していても一日家庭での役割がなく、話す相手も近隣にいないことなどから、生活の目標や楽しむ方法がわからず活動性のない生活に陥りやすい。このような不活発な生活が続くことで自立していた能力を低下させることにもなり、閉じこもりがちになる場合もある。したがって、家庭での活動が難しく、社会から孤立しがちな人々に活動参加の場を提供し、意義ある社会生活が過ごせるように支援する一つの方法が機能訓練事業と言える。浜村明德¹⁾は、「機能訓練には、障害を持った者あるいは虚弱老人等閉じこもり生活から開放し、社会参加への第一歩を踏み出すための機会を提供する役割がある。さらに、これらの役割は社会性の拡大や生きがい創造の支援へと発展していくためにも重要な役割となる。」と述べており、学生は機能訓練のもつ意義について、利用者の表情や言動から汲み取ることができていたことは大きな学習成果と言える。

次に、リハビリ教室の対象者について、年齢の若い方、車椅子の方、脳梗塞等麻痺のある方等何らかの身体障害を持っている方々である。脳梗塞等麻痺のある方は、治療的機能訓練からさらに在宅へ帰ってもリハビリが継続して行われることが必要である。しかし、往々にして在宅に帰ると寝たきりとなり、退院前に自立していた生活も徐々に家族の手に委ねられていくことが多く見受けられる。竹内孝仁²⁾は、「病院を退院した後の脳卒

中者における社会生活上の核心的問題は社会的孤立である。」と述べている。この社会的孤立が、その人のこれまでの生活スタイルへの影響にとどまらず、地域社会との交流をも絶って閉じこもりへと移行し、心身の生活活動の低下を招きやがて寝たきりや痴呆へと発展していくものとする。したがって、このような問題に発展しないためにも、機能訓練は予防的活動として重要な役割となる。例え障害があっても決してマイナスに捉えず、積極的に目標を持って参加されている対象者を意欲的だと学生は感じているように、同じ経験や不自由さを抱えている者同士の集まりの場が用意されているからこそ、お互いの間に生じる共感が、このような場への参加を容易に促していると思われる。そして、こうした多少の不安を抱えながらも集まってきた方たちに対して、表面上は機能訓練と言われる身体的活動、ゲームやさまざまな趣味活動を取り入れながら、グループワークの手法を用いてお互いの信頼関係がより密なものに築かれていくことになる。さらには、グループとしての高まりへと発展していき、これは相互交流の場で自然に仲間同士のカウンセリング＝ピアカウンセリングが行われていると考える。このことは、障害へのこだわり、抑鬱的な心理状況等共感し得る仲間、何でも話せる仲間の慰めや励ましから言葉によるあるいは言葉によらない自然のカウンセリングによって心理的克服が行われていると考える。これらのことから、学生は集団の強い結びつきと効果を感じることができ、集団のもつ力について理解を深めることができたと言える。看護は、個別性を重視し行われることが重要となるが、地域で行われる看護ではさらに集団へのアプローチの手法についても理解し実践されることが望まれる。これまでも、集団へのアプローチの手法について教授してきたが、今後さらに演習等の内容を取り入れ工夫して取り組んでいきたい。

次に、看護者の役割について、学生は対象者のことを理解して人間として尊重された態度で関わる姿を見ることで、地域で行われている看護のあり方について考えることができていく。関わるスタッフは、地域住民に最も身近な位置で日ごろより関わっている方が多いため、お互いの信頼関係

も厚く利用者も大変機能訓練に参加しやすいと思われる。しかし、訓練という言葉に縛られて利用者が受け身的になり、主体性がなかなか発揮されないという指摘もあるが、町では利用者の自己決定を尊重しながら、主体性が発揮され仲間同士が高まりあえるようにQOL向上へ向けた支援が行われている。したがって、看護者の役割として、利用者が楽しんで帰れるように笑顔で対応すること、じっくり話を聞く等看護者としての基本となる姿勢をもち、さらには一人の人間としてその人を理解するということが重要になってくると思われる。

また、看護は人々の健康の保持・増進及び健康回復の援助を目的としており、人の健康から病気を連続現象として捉え、どの時点においても必要な支援ができることが重要となる。施設内看護と施設外看護との関連性については教授しているが、理解し難い学生が多い。しかし、地域で行われている看護活動の実習を行うことで、入院し退院することがゴールでなく、その人は退院後在宅に帰り生活する人という、その人の捉え方が広がり理解しやすくなっている。さらに、在宅で有意義に過ごすためのサービスを知り紹介できる等社会資源への活用へも眼が向けられている。しかし、事業の法的根拠や具体的な社会資源の紹介や手続きの方法の理解には至っていない。今後、具体的に学習できるような方法を考えていく必要がある。

学生にとって、1日の実習であるが実に多くのことを考え理解できており、学習への拡がりが多くみられたことは大変意義のある実習と言える。

利用者の方にも、若い世代との交流を大変喜んでもらっている。今後は、より地域について事前の理解を深めることで、地域性との関連から対象者への理解もより深めることができると考える。さらに、利用者個人あるいは集団の健康づくりへの支援のあり方に視点をのこした保健活動の実習についても今後計画して取り組んでいきたい。

VI まとめ

1. 学生は、地域で生活しているあらゆる健康レベルにある対象と直接接し、地域で行われてい

る機能訓練事業の実習を通して、その事業の意義を理解することができていた。

2. 1の理解を踏まえ、さらに対象の捉え方の視野が広がり、地域の社会資源の理解へと学習の発展がみられた。
3. 施設内で行われている治療的機能訓練から、地域で行われている自立支援の訓練へと継続した支援が行われていることから、その関連性を見出しその必要性が理解できていた。
4. 地域看護は、個人あるいは集団を対象として行われる。集団という相互交流の場で集団＝仲間としての強い結びつきと効果を感じることができた。集団のもつ力について理解を深めることができた。

おわりに

地域で行われている機能訓練事業＝リハビリ教室の実習を通して、施設内看護から継続されて地域看護がどのような方法で行われているか、その関連性が認識できたことは大変有意義な実習であると言える。看護の対象となる人が住み慣れた家庭や地域で、いつまでも快適で生き生きとした生活が送れるよう支援することが必要となる。今後、QOL向上に向けた自立支援のあり方についての理解を深め、実践できるように教育内容を検討していきたい。

引用文献

- 1) 浜村明德他：地域リハビリテーションコーディネーター活動マニュアル、地域リハビリテーション活動評価マニュアル作成研究班、1997、20.
- 2) 竹内孝仁：自立支援のための地域リハビリテーション事業の具体的展開、地域保健（8）、1996、22.

参考文献

- 1) 土平俊子他：地域看護学教育の一方法、看護教育、38（4）、1997.
- 2) 頼富淳子：人々の生活の営みの中から学ぶ看護、看護教育39（5）、1998.